

# 忘れられた歴史と宗教

——紀伊半島の辺路と王子研究——（其の一）

豊島修

はじめに

日本の歴史には、すでに忘れられた宗教がある。その一例は、紀伊国熊野の那智の海岸から海の彼方の世界、すなわち熊野灘とそれに続く太平洋の彼方に理想郷があると信じられたことである。平安末期の歌謡集、『梁塵秘抄』巻第二の「<sup>(1)</sup>仏歌」に、

観音大悲は船筏 補陀落海にぞ泛べたる、

善根求むる人し有らば、乗せて渡さむ極楽へ

とあるのは、当時の観音信仰にもとづく補陀落世界・観音浄土の世界へ渡る補陀落渡海とその信仰をしめす好例である。<sup>(2)</sup>その基底には、古代の海岸の民の水葬儀礼を想定してはじめて理解される。つまり補陀落渡海とは、古代日本人の水葬儀礼が外来宗教である仏教と習合して生み出された宗教的実践行であり、次節以降で述べる「海洋宗教」（日

本人の海の生活に根ざした海の宗教全般を指す<sup>(3)</sup>をになう「辺路」修行者の捨身行と入水往生に繋がる宗教的実践行であったのである。

ここにいう「辺路」とは、『今昔物語集』<sup>(4)</sup>(巻三十一第十四話)に「四国ノ辺地と云ハ伊予、讃岐、阿波、土佐ノ海辺ノ廻也<sup>(傍点豊島以下同じ)</sup>」とあり、平安後期ころに海辺を廻る修行形態が四国にあった。さらにこのころの辺路修行の痕跡は、本論で検討する紀伊半島の海岸部をめぐる古道「大辺路」や、海中の小島・磯などにある「王子」のほか、関東の伊豆大島や、北陸の珠洲の岬などの島や岬を巡る辺路修行が『梁塵秘抄』や『今昔物語集』その他の古典に見出されるのである。<sup>(5)</sup>それは現在の日本宗教民俗学の解釈によれば、山中や山麓に死者を葬る葬墓習俗から、子孫の供養をうけて清められた死者霊は山岳に留まり、やがてその山が霊山・霊場となつて山岳宗教(山岳信仰)が発生する。それに対応して、海中の小島や磯あるいは海岸の岩屋・洞窟などは、前者が、海岸の民の海洋への水葬儀礼を踏まえて、死者霊が往く海洋他界・海上他界の理想郷(常世)への通う道であり、また、後者は、「常世」から去来する死者霊(先祖霊)を遥拝する「海洋宗教」(海洋信仰)の聖地であつたと推測される。<sup>(6)</sup>

補陀落渡海については、すでに平安時代に熊野の那智から三回の渡海記事が見られるが、この海洋の捨身行と入水儀礼が記録に多く見えるのは、中世の時代である。そして近世になると、ふたたび水葬儀礼になる。たとえば、亡くなった那智補陀洛山寺の住職を生きた牀にして、熊野灘から太平洋の彼方に水葬する葬送習俗あるいは葬墓習俗(これを近世では「補陀落渡海」といった)が存在したことが、同寺の記録や絵画史料からわかるのである。補陀洛山寺では、この葬送習俗・葬墓習俗が近世中期まで継続されたが、補陀落渡海の歴史とその信仰実態の究明については、近年の根井浄氏の研究<sup>(8)</sup>が参考になる。いずれにしても、この宗教的実践行を各時代の中で詳細に検討し、位置づけを行ったのちに、つぎの時代にどのように展開するかを見極めなくてはならない。

以上は、すでに日本歴史から忘れられた宗教（信仰）の事例を補陀落渡海と補陀落信仰にもとめて概略したが、このほか、おなじ日本宗教や日本民俗宗教に分類される宗教的実践行と信仰習俗があったと推測される。それらを文献史料や民俗資料などの分析・検討から復元し、各時代に位置づける作業が日本史や日本宗教史のみならず、日本宗教民俗学や修験道史研究の進展のためにも有益なことであろう。先にふれた紀伊の「辺路と王子」の問題もその一例に加えてよいと思われるが、この問題については、これまで本格的な研究はほとんど見られない。管見では、わずかに近藤喜博氏が四国の辺路の存在とその形成に紀伊熊野の辺路の影響があることを指摘したのが早く、さらに五来重氏や村山修一氏が海洋宗教（信仰）研究の問題として注目されているにすぎない。そのなかで五来重氏は膨大な海洋宗教の体系を構想され、その一部を著書や論文に論じられているのが唯一の本格的な研究である。筆者も同氏の研究を受けて平安中期に成立する熊野三山以前の辺路信仰・王子信仰の問題や、熊野修験道史研究の立場から紀伊の海洋宗教研究を検討しているが、この場合、平安後期ころの史料に見出される「辺路」<sup>(1)</sup> Ⅱ大辺路と「王子」の關係、およびその信仰実態が問題である。しかもそれが中世以降のように展開して、地域の人びとの精神生活に影響を与えたのか、またその信仰の伝播者であり、辺路信仰・王子信仰を担った宗教者Ⅱ辺路修行者の内実の課題などが横たわっている。

以下では、このような課題をもつ紀伊熊野の「辺路と王子」について若干検討し、忘れられた歴史と宗教の問題に迫りたい。

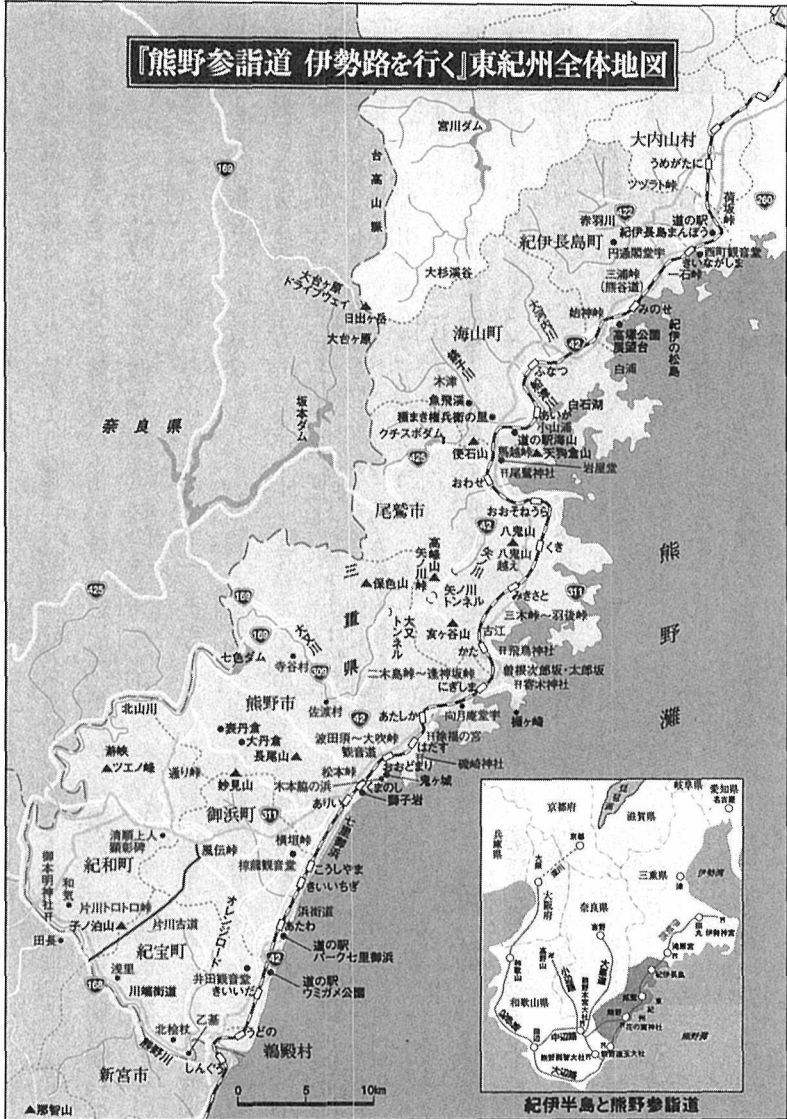
### 一、辺路と王子とは——近世の辺路・王子説と課題

最初に紀伊熊野に存在した「辺路」とは何か、また「王子」とは何かという基本的課題について、近世文献ではど

のように記されているかを確認して、その課題を提示しておきたい。

元和九年（一六三三）成立の笑話『醒醉笑』<sup>(12)</sup>（安楽庵策伝）に、「（上略）紀の国の山家に、大辺路小辺路とて、峰高う岸けはしく、つづら折りなるつた（伝）ひ道、人馬の往来たやすからぬ切所あり」と見えている。ここには南紀の海岸を通る大辺路や、紀州の北部に聳える霊場高野山と、その南に位置する熊野本宮を南北に直線的にむすぶ参詣道の「小辺路」が取り上げられ、いずれも文字通り熊野への距離と辺地性をあらわす意味で記されている。同書は、策伝が隠居後の元和九年（一六三三）に編集し、五年後の寛永五年（一六二八）に京都所司代板倉重宗に献呈したとされるから、少なくとも戦国期の伝承をもっていると考えてよい。しかも大辺路・小辺路の呼称も戦国期ころまでに成立していたとされるが、近世文献にもとづく大辺路の呼称はそうであつても、大辺路の成立については、先の『今昔物語集』に見える四国の辺路の存在や、既述した近藤喜博氏の辺路論からも大いに疑問である。ただ熊野への距離と辺地性をあらわす意味については、院政期以降、上皇・女院を中心とした熊野御幸に採用された熊野路、つまり田辺から東に入る古道「中辺路」も同様であつただろうと思う。

さらに近世後期から幕末期の大辺路について確認すると、幕末の儒者斎藤拙堂の『南遊志』に「田辺より三山に至るに両路有り」として、「南のかた富田より海岸に沿う者を大辺路と曰ふ」（紀南部文化財研究会編『熊野古道大辺路調査報告書』）とあり、大辺路は〈富田〉から海岸沿いの道を南に進むのである。また『南遊志』より早い本居宣長の『玉勝間』（『日本思想大系』四〇所収）の「いそのへぢ」項に、紀伊熊野では牟婁郡田辺から海辺を南下して熊野に出る道という伝承が記される。これが大辺路の出発点を田辺（現田辺市）と規定し、それ以东は南紀の那智あるいは新宮までのコースと説く一般論<sup>(14)</sup>の有力な史料となっているが、この説についても、修験道史研究の立場から異なる見解があることは後に述べたい。



みえ熊野学研究会編『熊野参詣道伊勢路を行く』(2004年3月) から引用

ともあれこれらの史料は、近世の紀伊半島における大辺路コースの呼称および起源と伝承を述べた主要文献であるが、大辺路の成立に限定すると、このような遅い時期とは考えられない。右にふれた戦国期以前の成立であることは容易に理解される。そして歴史学研究者の小山靖憲氏は紀伊路・中辺路の大半が「一二世紀の院政期に出現した」ことを説きながら、大辺路に存在する王子社は、中世にはほとんどみられないとして、比較的新しいものが多いと、大辺路に存在した王子も戦国期ころの成立を固守する。そのため新宮の熊野川以東——現三重県側の海岸——を通る大辺路と王子の実態をふくむ諸相は検討していない。あくまで小山氏は院政期以降に成立した熊野御幸の中辺路を本街道と把握して、大辺路は「相対的にはマイナーな存在であった」<sup>(16)</sup>と述べるのみである。しかし中世に中辺路が盛況であった歴史とは別に、中世前後の紀伊半島の大辺路と王子の様相を他方面から検討しなければならないだろう。

## 二、熊野川以東の大辺路と王子

そこで本節では、右にふれた熊野川以東の大辺路の存在とそのコース、および聖地（海洋への遥拝とその信仰）であった王子（社）について考えてみたい。まず大辺路コースの問題については、すでに近世文献をふまえて紀伊田辺から以東の那智または新宮までと規定される一般論を述べたが、他方、五来重氏は修験道史研究の立場から海洋宗教論を展開して、奈良時代以前から「山岳海辺修行者」の辺路修行があったこと、しかもそれは「那智をふくむ紀伊半島の海辺の岩を行道しながら、伊勢・志摩・紀伊から和泉にいたるコースが存在した」<sup>(17)</sup>という、壮大な辺路論を展開されている。以下この推論について検討してみよう。

まず紀伊熊野の山岳海辺修行者によって、大辺路にある海洋宗教の聖地Ⅱ「王子」を巡る辺路修行については、奈良時代の仏教説話集『日本霊異記』<sup>(18)</sup>（下巻第一話）に、「紀伊国牟婁郡熊野村」で活躍した永興禪師と同行の一禪師の



花の窟

話がある。それによると実在の法華持経者（十禅師のひとり）であった永興のところに来た一禅師は、「懸<sub>レ</sub>敵<sub>レ</sub>捉<sub>レ</sub>身而<sub>レ</sub>死」という修験道の苦行の極地である捨身行を行ったと伝える。しかも当初、この一禅師は伊勢の方へ越えて行きたいと云ったという。これは海岸の道、すなわち西の「紀伊路」（「梁塵秘抄」）とは異なり、東からの「伊勢路」に連なる大辺路を通って伊勢国に行くコースであったらしい。このことは永興と同じ法華経修行の実践者である一禅師が、また大辺路の海辺の岬・島・巖などを巡る辺路修行者（初期修験道の実践者）であったと考えてよいであろう。さらに紀伊海岸の辺路を説明する史料としては、平安中期の紀行文「いほぬし」<sup>(19)</sup>（巻第三百二十七）がある。同書には、「はなのいはや」（花の窟）とその傍らにあった「わうじのいはや」（王子の岩屋）の存在を記していた。紀伊熊野の大辺路に存在する王子の文献上の初見とされる。現在の三重県熊野市有馬町に当てられるが、ここはまた、『日本書紀』神代上に見える、女神のイザナミノミコトが葬むられたという「紀伊国熊野」の「有馬村」を指すのであろう。しかも

この神話伝承が重要視される理由の一点は、その後「伊勢・熊野」を一体化する信仰を生み出した（『長勘寛文』所載「熊野権現御垂迹縁起」）ものとして貴重である。それは伊勢熊野同体の信仰が伊勢から熊野へ参詣する古道、つまり古代末から中世の大辺路に連なる「伊勢路」を開いたものと推測されるからである。<sup>(20)</sup>

時代は少し下がるが、一二〇五年（元久二）成立の『新古今和歌集』<sup>(21)</sup>の行尊の歌に、「いそのへちの方に修行し侍るに……」とあり、一三世紀初期ころにも、後述

する行尊のような熊野系の山岳海辺修行者が「いそのへち」(磯の辺路)を巡り、遊行する苦行修行を行っていた(後述)。これも大辺路を指すと考えられるが、あるいは切り目王子や岩代王子などの海岸を通る路を指したのかも知れない。さらに同時期の歌に「散る花や 磯のへちふむ山伏の苔の衣はうはぎなるらむ」<sup>(22)</sup>とあるのは、当時、山伏が海岸の大辺路を通って辺路修行を実践していたことを物語ると思われる。これもおそらく、熊野系の山岳海辺修行者の修行形態と考えてよいであろう。

これを要するに、新宮の熊野川以东の大辺路と辺路の問題は、院政期以降、山中に入る「中辺路」とそこに発生する「九十九王子」の成立以前に、熊野川以东に存在した海岸の王子を巡る辺路信仰が存在したことを理解しなければならぬ。では大辺路の辺路修行の具体相とは何であろうか。それは熊野灘の海中に近い海岸の磯や岩、あるいは大辺路の窟などの王子を巡る行道修行や礼拝、あるいはそこで聖火を焚いたり、海神、龍宮、補陀落などを崇拜(遥拝)することであった。<sup>(23)</sup> しかもこうした海洋宗教の聖地(王子から、海の彼方にあると信じられた「常世」の理想郷を遥拝し、またその理想郷から恩寵(幸せ・福の神など)の性格を有する「帰<sub>よ</sub>り来る神(先祖霊)」が、磯・岩などを通って、海岸の王子神を祭祀する神聖な洞窟や窟などに去来する信仰の存在も理解される。このような意味で「花の窟」と「わうじのいわや」(王子の岩屋)は、古代の洞窟信仰や海洋世界の常世信仰と辺路信仰とが複合した聖地の典型的な事例と考えてよいであろう。前記『いほぬし』によれば、著者の増基法師が訪れた時代には、花の窟に経塚が埋納され、卒塔婆供養が行なわれる墓所と記されていた。しかしこの経塚を埋納する場所こそが、辺路修行者の巡る「行道」が行われた聖地であるが、<sup>(24)</sup> 右の紀行文は「行道」その他の聖地の痕跡を記さない。そして花の窟の傍らに「わうじのいわや」(王子の岩屋)があったことを淡々と述べるのみである。

しかし注意したいのは、この「わうじのいわや」(王子の岩屋)の辺路信仰・王子信仰が時間を越えて継承され、近



世初期ころの当地の漁民に信仰されていたことである。すなわち古泊浦(現熊野市古泊)の漁業文書、万治三年(一六六〇)子六月十六日付『乍尾恐御訴状申上候』<sup>(25)</sup>の一札に、古泊浦の網代漁場として「はこ嶋のされおうじ」以下九箇所の「・・・王子」が存在していたことを記していた。同訴訟文書の内容というのは、これら九箇所の王子が祀られる小島や大辺路沿岸の王子群の祭祀場所が「かます(鯛)、あし(鱈)、むろ(室鱈カ)、むつ(鱈)」などの豊富な漁獲場であり、そこに仕掛けてある古泊浦の網十六状を他の浦の漁民が「引、申、迷惑仕候事」という意味の訴訟を、同浦の庄屋吉太夫と組頭利左衛門、吉太郎の三名が本本組大庄屋の喜田作治兵衛宛に訴えている内容である。この九箇所の「王子」の中には「大はんにや前」(大般若鼻、俗称だいはな)の一条があり、近世後期の地誌『紀伊続風土記』(牟婁郡口有馬村の項)には、すでに述べた「花窟を般若の窟と称す」との伝承が記されていた。この聖地を地元では「大はんにや前」とあり、それは、花の窟王子の転化であり、現在も王子の窟を指すと伝承している。つまり海岸の陸上拝所であるが、これは本来、海中から「帰りくる神」||先祖神が陸上の遥拝所に去来した聖地であり、そこで王子神の信仰が継続された一例であろう。さらに「はこ嶋のされおうじ」や「中ノ岩ノ王子」などの、海中にある小島の王子についても、筆者の現地調査で、地図を参照して沿岸から案内してくれた地元漁師の方に確認し、海中の小島に祀られる右の二王子は、小島内での実態は不明ながら、そこはいずれも豊漁をもたらす漁場であるという伝承をお聞きした。これは小島に祀られる王子(=王子神)が、本来、豊漁の神であり、それは海神であった信仰伝承を物語っている。

このような海中の小島に王子(王子神)が祀られるという信仰伝承を載せる近世初期の訴訟文書は、王子信仰を示す文献史料としても大変貴重であり、さらにその歴史的背景や関連史料の検証が要求されるが、この海中の小島の王子神(=若宮であろう)を、一般的な「神子神」<sup>(27)</sup>説で説明できるかどうかは大いに疑問である。そうではなく海中の小

島の王子神である紀伊の辺路の王子とは、「若く荒々しい」神の性格（『荒魂』の信仰）から呼称されたものであろう。それが「若宮」と呼称され、この王子（若宮）は熊野三山制の成立後、第四殿に若宮（若一王子）として祭祀されたのである。<sup>(28)</sup>それは熊野の神の子としての「御子神」ではなく、海中の小島や海岸の辺路にある王子社・王子の祠に祀られた海洋神であること、しかもそれは本来、熊野新宮に祀られた「阿須賀王子」であったことは次節で述べたい。ともあれ、この海洋神（王子）が外来宗教である仏教と習合すると、観音、不動、薬師、エビス神、あるいは稲荷、弁天、龍神などの仏教あるいは仏教的民俗神に変化するのである。<sup>(29)</sup>このように把握すると、海洋宗教にたいする日本人の信仰実態が理解できると思われるが、右に述べた「はこ嶋のされおうじ」などの九箇所の王子の歴史の変遷とその内容については、さらに詳細な検討が必要である。それにしても紀伊熊野の王子信仰が時間を超えて継続・信仰される、しかも近世初期熊野の漁民の生産とそれに関わる庶民信仰として維持されてきたことは、大いに驚かされるのである。

### 三、大辺路コースの拡大と葛城二十八宿の「峰路」の問題

紀伊半島の大辺路と王子の諸問題について、もう一つ重要な論点は、既述した紀伊海岸の辺路が「那智をふくむ紀伊半島の海辺の岩を行道しながら、伊勢・志摩・紀伊から和泉にいたるコースが存在した」という推論である。この推論は大辺路コースが一般論とは異なり、さらに拡大され広範囲に及んでいることが特徴的である。すなわち和泉地域の島から海岸を南下して、紀伊半島沿岸の古道大辺路を経て、さらに熊野川以東に列なって伊勢地域まで及んでいたという主張である。それは広範囲な大辺路コースが、何度も述べてきた海岸をめぐる辺路信仰でむすばれていたことを物語っている。その結果、この大辺路コースは「東からの紀伊の辺路の終点」であり、さらに葛城修験の「峰路

の出発点<sup>(30)</sup>」であったことを明らかにしたのである。

その背景には、平安中期から南北朝時代ころまで、修験道界をリードした吉野大峰と熊野修験<sup>(31)</sup>の活動とともに、もう一方の畿内の修験道の雄、葛城修験の存在と、この修験の入峰修行の聖地が重要視されたからにはかならない。具体的には、(一)、葛城修験の入峰修行の第一番「一宿」が現和歌山市加太にある伽陀寺、あるいはその西方、紀淡海峡上に浮ぶ友ヶ島であったこと。(二)、(一)に関連して、伽陀寺あるいは後世の友ヶ島が紀伊半島の大辺路の「終点」と、葛城修験の二十八宿行場の「峰路」の接点に相当していたこと。(三)、(二)と関連するが、平安後期に存在した畿内を中心とする「観音霊所三十三所」の存在、および観音霊所三十三所順礼の成立に関与したのが先にふれた行尊の寺門派、後の本山派修験が友ヶ島を第一の聖地とした理由などからである。これらの問題についてさらに検討したい。

### (一)、葛城修験の「一宿」について

そのうち(一)の葛城修験の「一宿」の問題については、すでに鎌倉初期あるいはそれ以前の成立とされる『諸山縁起<sup>(32)</sup>』の「天法輪山」の項(宿の次第)に、「二 伽陀寺」とあり、それに続けて「三 一宿」に「今の八幡これなり」とある。また応永八年(一四二四)八月十五日付の『賀太庄八幡宮神事人物日記』(向井家文書<sup>(33)</sup>)にも「賀太八幡宮」が見えるから、これが「一宿」の「今の八幡」(「諸山縁起」)に相当すると考えられている。その後鎌倉時代に「一宿」は伽陀寺に移行したことが、正安二年(二三〇〇)十二月三日付の『伽太寺寺僧連署置文』(同文書<sup>(34)</sup>)に、「葛木一宿伽陀寺」と見えて確かである。また同年十二月三日付の『定置 葛城一宿伽陀寺別当職事』<sup>(35)</sup>にも、伽陀寺を「一宿」と記されており、後世の『紀伊続風土記』も当寺を「其二十八宿の内の第一の宿なり」と記載していた。

他方、「一の宿」を友ヶ島とする説もある。これは既述した経塚を埋納した場所が「一宿」（聖地）とする説である。たとえば明治二年（一八六九）の『大指出帳』（利光家所蔵<sup>36</sup>）によれば、友ヶ島には向之坊（聖護院支配）が奉仕する葛城修験の行所が五カ所（上品窟・観念窟・關伽井・深蛇池・剣之池）あり、そのうち「上品窟」が第一の宿であったという。しかも毎年の年中行事に留意すると、「聖護院宮御代參住心院」の代僧先達衆が、禁裏御所の御祈禱のために参来したことなどである（『紀伊続風土記』）。また近世後期の『葛嶺雜記<sup>37</sup>』にも、友ヶ島の「序品窟」を葛城二十八宿の第一宿としている。このように葛城修験の第一宿については二説があり、そこには歴史の変遷があるので断定はできない。しかし伽陀寺説あるいは後世の友ヶ島説をとっても、そこは東からの紀伊の辺路＝大辺路の終点にふさわしい聖地であり、そこを葛城修験が入峰の出発点としたという推定は肯定してよいと思われる。

## (二)、平安後期の観音靈所三十三所順礼・三十三所順礼の問題

さらに第三の問題に目を向けると、平安後期の行尊伝の「観音靈所三十三所順礼」（『寺門高僧記』四所収）は、もう一つの覚忠伝、すなわち「応保元年（一一六一）正月、三十三所順礼」（『寺門高僧記』六）よりも古い文献として知られており重要である。しかも当時の「観音靈所三十三所順礼」や「三十三所順礼」の成立に、記述した行尊の関与があるといい、覚忠の関与があるといい、いずれも天台系寺門派の三井寺（園城寺）修験であり、彼らはまた熊野と深い関係にあった山岳海辺修行者であることが重要であろう。詳細については宮家準氏や速見侑氏などの研究に譲るが、先の行尊伝と両氏の研究によると、彼の師増誉は寺門派の中でも、とくに大峰修験道の天台系の開祖（中興）といべき地位を占めていた人物であった。また増誉は熊野三山檢校に補任せられ、聖護院を開いた人物でもある。加えて重要なことは「御室戸僧正」と呼ばれた増誉（一乗寺僧正）の叔父隆明の存在である。隆明については『寺門高僧

記』四や『宇治拾遺物語』巻五によって御室戸寺にいたことが伝えられている。しかもこの御室戸僧正は『宇治拾遺物語』巻五によると、御室戸寺に籠って「居おこない」をして法験を獲得したという興味深い伝承を記していた。<sup>(39)</sup>このことを指摘した五来重氏は、平安後期の観音霊所順礼の実践行は行尊に代表される寺門派の「修験派」とともに、もう一つの寺門派の隆明に伝承される「法験派」Ⅱ「巡礼回国派」が考えられるという新見解を提示した。そしてほぼ畿内にある観音霊所三十三所寺院に「納経」する巡礼方式は、法験派（巡礼回国派）が編み出したと推論を述べる<sup>(40)</sup>のは注意されよう。このような推論によって歴史的には、鎌倉期以降に展開する六十六部回国聖の動向<sup>(41)</sup>と、納経という巡礼方式のあり方、および「西国」三十三所観音巡礼の諸相に取り組むことができるのである。

以上の検討から、紀伊半島の大辺路コースを、伽陀寺あるいは後の友ヶ島を拠点として南下する海岸の路を通り、南紀の田辺から那智・新宮を通過点として、さらに熊野川以東の三重県熊野市や尾鷲市周辺から伊勢まで及ぶという説に賛同したい。その背景には、記述した平安後期から中世の吉野大峰修験や熊野修験とともに、葛城修験の入峰修行の実相があったと思われるが、さらに当時の「観音霊所三十三所順礼」・「三十三所巡礼」と関連する問題である。それは、もうひとつの課題である紀伊半島の「王子」の諸相とどのように関わるのかという問題とともに、さらに検討しなければならない。

#### 四、王子・若宮・阿須賀社

これまで論じてきた紀伊半島の王子というのは、大辺路の拝所に熊野信仰が重複してきたときに名づけられるものであり、そこには熊野信仰の初期の伝播に海を通路として弘まった背景があると推測される。さらに陸上の遥拝所についても、既述の『いほぬし』に記す経塚の埋納や、王子社・小祠に神仏が安置されているのが特徴である。古代

から中世の辺路修行者は、このような本尊や経塚の埋納場所を中心に「巡り行道」を行ない、他方では、海に面した山や巖を巡る苦行を实践したのである。紀伊半島の王子という問題は、それほど複雑な様相と歴史が考えられるが、いま前者の問題に関連して、熊野新宮の海の近くに鎮座する阿須賀神社を抜きにして考えられない。まず阿須賀社の景観に注意すると、同社は小島を残しており、そこは蓬萊山と呼ばれる。この社がもと王子であったことは、平安末期の藤原宗忠の日記から確かである。「中右記」(三)<sup>(42)</sup>天仁二年(一一〇九)十月二十七日条に「参阿須賀王子奉幣」と見え、これが後白河上皇の熊野御幸の一環として、新宮早玉神社に参詣した記事として注意される。

さらに、この阿須賀王子が熊野三山奉斎以前から王子として祭祀されていたことは、すでに述べたことがある。<sup>(43)</sup>熊野修験の最も古い縁起「熊野権現御垂迹縁起」の分析による推測であるが、その根拠は、同縁起に唐から飛来した熊野権現(三所)が九州・中国・四国の大霊場から、紀伊国の切部山↓新宮の神倉山を経て阿須賀の北に位置する石淵谷に留まったと伝承していること、しかも阿須賀に留まらなかったのは、すでに同王子が祭祀されていたという推論からである。さらに阿須賀社の山を蓬萊山とよぶのは、これがもと新宮川河口の海中の島であったことから名付けられたものであろう。つまり蓬萊山を「浜の宮」として、それに対する神倉山を「山の宮」とする関係で理解される。<sup>(44)</sup>いづれも一連の王子信仰で解釈されねばならないのである。

ところで熊野三山組織後の社殿の配置後、三所権現の次の第四殿に若宮(若一王子)が祭祀されたが(「長秋記」・「紀伊続風土記」の記載など)、この若宮は通説でいう「御子神」ではなく、「若く荒々しい」神の性格から呼ばれたことは第二節で述べた。しかもこの若宮若一王子は、新宮の阿須賀王子であった事実には驚くのである。この史実を近世熊野川以東——現熊野市周辺——の各村の鎮守社に留意して、「紀伊続風土記」の内容から検討してみたい。

まず、この地域に阿須賀社や王子権現が村の鎮守社として祭祀されているのは、その背景に、一時期、新宮の阿須

賀権現の伝播があり、当地域の辺路の王子信仰と習合して生み出された現象であつただろう。たとえば、近世の木本郷（六箇村）に属した（木本浦）の若一王子社は、青石を御神体とするが、同社は「今旧地に王子権現元宮」の小社があつたと伝えていた。そこには阿須賀権現とは記されていないが、海からあがつたと思われる青石を御神体とし、旧社地（元宮）に王子権現＝阿須賀が祭祀された歴史を推定したい。また同郷の一村（波田須）は熊野古道（伊勢路・大辺路）の中で、「伊勢路」の最も古い鎌倉期に造られた石畳が約三〇〇メートルに渡り残っている地域である。この村にも不老不死の秘薬を求めて漂着した徐福伝承と徐福の宮（元、王子であろう）があり、実際にこの徐福の宮に立つと、宮の周囲には「巡り行道」ができる道筋が存在していた。さらに木本郷の東に位置する（曾根浦）（現尾鷲市曾根）の飛鳥明神社は、維新前まで「わかいち、王子大権現」＝若一王子の伝承があつたことは注意されねばならない。というのは、この「わかいち王子」の名称は海洋宗教の王子を代表するものとして存在し、すでに平安末期の歌人で、宗教者でもあつた西行の歌集『山家集』<sup>45</sup>にも「わかいし」と、地元の人びとの伝承を記していたからである。すなわち西行は、空海が讃岐国の我拝師山（四八二メートル）を登山したその山を登ったとき、「わかはいし」と其の山をば申すなり。その辺の人はわかいしと申しならひたる山文字をばすて、申さず」という伝承を記していた。つまり地元の人びとは、「わかはいし（我拝師）山」の山を省略して発音するからというが、これも、もとは熊野若一王子（わかいち）にやぐいちとも読まれる、阿須賀王子）が祀られていたからと推測される。四国の霊場（八十八カ所札所寺院）には辺路信仰の遺物や伝承が多いが、我拝師山にも熊野信仰（阿須賀王子）が伝播されていたのではないか。そして青年空海がこの山で辺路修行をしていたことが重要である。こうして右の「わかいち」伝承を、西行が自著に書き記したこと、そのことに重要な意味があるといえるのである。

そうすると院政期に、後白河上皇が京都に若王子を勧請した例や、時代が下って近世の江戸に熊野権現を勧請し、<sup>47</sup>

それを若一王子社といった『江戸名所図会』(巻五)の例なども、おそらく阿須賀(若宮)王子の勧請と祭祀を想定しなければならぬだろう。これも若宮Ⅱ阿須賀王子が、本来、海洋宗教の王子を代表する神であり、そのため熊野三山成立後に、三所権現の第四殿に祭祀された歴史が推測されているのは、大変興味深い。つまり熊野権現の序列を「熊野本宮、新宮、那智、阿須賀(若宮)」であったという重要な推論である。<sup>(48)</sup>もつともこの仮説は熊野三山の祭神成立に関わる大問題であり、いまはこのような海洋宗教論からの指摘があることを報告し、詳細な検討は後日に待たなければならない。それほどに紀伊半島の辺路にある王子Ⅱ阿須賀王子の問題は、熊野三山の祭神研究はもろんのこと、熊野地域の庶民信仰史を究明するうえでも大切な祭神であったことが理解される。

### おわりに

以上、紀伊熊野に特徴的な海洋宗教の問題について、古道「大辺路」と「王子」の様相から検討してきたが、推論を重ねたきらいがある。しかし明確になった点も多いのではないかと思われる。その第一は、大辺路コースを田辺から那智・新宮までとする近世文献説とは異なり、近世以前には、北西を葛城修験の入峰修行の第一番(一の宿)から那智寺、あるいは後の友ヶ島と位置づけ、そこを南下して紀伊半島の海岸の道を通り、さらに熊野川以東を越えて、伊勢まで及んでいた論を確認した点である。この広範囲な大辺路コースの成立背景に、吉野大峰修験と熊野修験および葛城修験の存在があり、さらに葛城修験の行場(一の宿)の聖地と海の王子(神)の習合によつて、大辺路と峰路の接点と理解されたからにはかならない。第二は、従来、大辺路の王子信仰が不明であった熊野川以東の諸地域に分布する王子社とその祭神について、文献史料と民俗伝承から検討し、院政期以前に、海岸の辺路に王子信仰があったこと。それは辺路修行者が王子の窟や卒塔婆供養の場を聖地(Ⅱ王子)として、埋納された経塚や祭神を対象に



「巡り行道を」行ない、海神を遙拝する苦行が実践されていたことである。さらに当域の王子信仰は熊野新宮の阿須賀王子が多く祀られており、阿須賀の神(熊野権現)が王子神として伝播・勧請された時期を想定しなければならぬ。しかもこの王子信仰は阿須賀信仰は、時間を越えて近世前期ころに古泊浦の海岸の窟や同有馬村の花の窟、あるいは海中の小島に祭祀されており、庶民信仰的には豊漁をもたらす王子信仰として当域の漁民に受け入れられていた。これこそが海から去来する先祖霊を王子として遙拝し、庶民信仰化した海洋宗教の様相をよく示しているといえよう。辺路信仰・王子信仰と熊野漁民の精神生活の関わりを窺ううえで注意しなければならないのである。

このような海洋宗教を構成する辺路と王子信仰は、冒頭で述べた紀伊熊野以外の島や半島・岬に見出されたが、さらに四国の遍路と札所寺院に先行する辺路信仰と奥の院の問題、および海岸の路を廻る辺路修行者の存在が次第にわかってくる<sup>(49)</sup>。したがって、今後も小稿で指摘した課題を検討するとともに、広く辺路と王子の宗教が存在する諸地域を調査・検討して、海洋宗教の問題設定と日本人の信仰の実相を分析しなければならない。

## 註

- (1) 日本古典文学大系七三。
- (2) 豊島修『熊野信仰と修験道』頁五四以下、名著出版、一九九〇年、(豊島著書①)、同『死の国・熊野』講談社現代新書一〇〇三、講談社、一九九二年(豊島著書②)。
- (3) 五来重「根の国と海洋宗教」『現代宗教』七所収、青土社、一九八四年。
- (4) 日本古典文学大系二五。
- (5) たとえば『今昔物語集』巻十七第十六話「伊豆国大嶋郡建地蔵寺語」に、「今昔、伊豆ノ国、大嶋ノ郡ニ海ノ岸遙ニ絶テ、鳥獸モ難通キ嶋有リ。極テ悪キ辺地也。其嶋ノ西南ノ方ニ一ノ勝地有リ。昔、江(役)ノ優婆塞ノ此ノ国ニ被流タリケル時ニ、時々飛来テ、勤メ行ヒ給ケル所也。而ルニ嵯峨天皇ノ御代ニ一人ノ修行ノ僧出来レリ。名ヲバ蔵海ト云ケリ。(後略)」

とある。ここには弘法大師空海の在世ころに、伊豆大島で辺路修行が行われていたこと、それは役小角の辺路修行の後を継承する蔵海が辺路修行を実践していた。またその修行とは「口ニハ專ニ地藏ノ名号ヲ唱ヘテ唱ヘテ断ツ事无シ。身ニハ久ウ地藏ノ形像ヲ負テ、身ヲ放チ奉ル事无シ。」(同書)とあり、辺路修行者が信仰する本尊は地藏を笈に背負って、名号を一心に唱えながら海岸の路を廻つたらしい。このほか平安時代から鎌倉期の辺路修行者の様相については、寺内浩「平安時代の四国遍路―辺路修行をめぐる―」(『四国遍路と世界の巡礼―人的移動・交流とその社会的アプローチ―』二〇〇五年三月、愛媛大学法文学部、参照。また西 耕生「四国辺路」異見(同書)も併せて参照のこと。尚、本報告書については小嶋博巳氏から提供を受けた。記して謝意を申しあげる。

- (6) 註(3)、同『遊行と巡礼』角川選書一九二、角川書店、一九八九年。註(2)。
- (7) 『那智山書上ヶ帳』(『和歌山県史』第三卷)所収「浜ノ宮補陀洛寺住職左之通」註(2)。熊野本願文書研究会編著『熊野本願所史料』所収「本願中出入証跡之写」(巻)参照。
- (8) 根井浄『補陀落渡海史』法藏館、二〇〇一年。
- (9) 近藤喜博『四国遍路』桜楓社、一九七一年、同『四国遍路研究』三弥井書店、一九八二年。
- (10) 五来重「平安時代の熊野」『熊野市史』上所収、熊野市、一九八三年、同註(6)。村山修一「熊野信仰と海洋信仰」(『海と列島文化』八巻、小学館、一九九二年)。
- (11) 註(2)、同「四国遍路とさぬき市周辺の札所寺院」『さぬき市の文化財』第二号、さぬき市文化財保護協会、二〇〇五年。
- (12) 『日本随筆大成』(第三期) 2所収。
- (13) 小山靖憲『熊野古道』(以下、小山氏著書①)一六四―一六五頁、岩波新書六六五、二〇〇年。
- (14) 註(13)、小山靖憲・笠原正夫編『南紀と熊野古道』「街道の日本史」三六、(小山氏著書②)、吉川弘文館、二〇〇三年、同「吉野・高野・熊野をゆく―霊場と参詣の道」(小山氏著書③)、朝日新聞社、二〇〇四年。
- (15) (16) 註(14) 小山氏著書③。
- (17) 註(6) 五来重『遊行と巡礼』九八頁。
- (18) 日本古典文学大系七〇。
- (19) 『群書類従』紀行部三三七。註(2)。

- (20) 註(2)、同「紀伊山地の歴史と文化について」(大阪市立美術館の特別展『祈りの道―吉野・熊野・高野の名宝』「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録記念、毎日新聞社・NHK、二〇〇四年)。
- (21) 日本古典文学大系二八。
- (22) 桑原康宏「熊野街道の「辺路」私考」(『和歌山地理』二三号、二〇〇二年)。
- (23) 註(2)。註(17)。
- (24) 辺路修行者が経塚や本尊の場所を「めぐり行道」した一例は、西行の家集『山家集 雑』(『和歌文学大系』二一「山家集・聞書集・残集」所収、明治書院、二〇〇三年)に見えている。これは西行が四国霊場七十五番札所寺院・普通寺の背後に聳える我拝師山(四八二メートル)を登った時、この山を同書の詞書は「曼荼羅寺の行道所」と記し、さらに「大師の御経書きて埋ませおはしましたる山の岑なり、坊(朴)の外(卒塔婆)一丈はかりなる壇築きて建てられたり、それへ日ごとに登らせおはしまして、行道しおはしましけると、申伝たり、」云々と記していた。この詞書を紹介した五来重氏は「辺路修行は海に面した山や巖をめぐるが、その行道の中心に本尊か経塚があった」と指摘している。註(17)参照。なお我拝師山における西行の辺路修行の問題については、別の機会に検討したい。
- (25) 「古泊史料」大屋氏古文書六(『平八洲史調査研究ノート』所収、熊野市教育委員会、一九八九年)。
- (26) 筆者の二〇〇四年七月の熊野市内における現地調査による。当日、御案内をいただいた花尻薫氏と、熊野市教育委員会の皆様にお礼を申し上げる。
- (27) たとえば註(13)、(14)。
- (28) たとえば『長秋記』長承三年(一一三四)二月一日条。『紀伊続風土記』その他。
- (29) 註(6)。註(2)、同「稲荷信仰と福神―畿内地域を中心に―」(『熊野信仰史研究と庶民信仰史論』所収)、清文堂、二〇〇五年(豊島修著③)。
- (30) 註(17)。
- (31) 五来重『修験道入門』角川書店、一九八〇年。註(2)。宮家準『熊野修験』吉川弘文館、一九九二年。
- (32) 『日本思想大系』二〇。
- (33) (34)(35)(36)(37) ここでは『和歌山県の地名』日本歴史地名大系三一、を参照した。平凡社、一九八三年。なお、これま

での葛城修験道の歴史的研究については不十分である。その他中野榮治『葛城の峰と修験の道』ナカニシヤ出版、二〇〇二年。

(38) 註(31) 宮家準前掲書。速水侑『観音・地蔵・不動』講談社現代新書一三三二六、講談社、一九九六年。

(39)(40) 註(17)。

(41) 中世から近世における六十六部回国聖の様相については、巡礼研究会編『巡礼論集2』所収の諸論文を参照、岩田書院、二〇〇三年。

(42) 『増補』史料大成』所収。

(43)(44) 註(2)。

(45) 註(11) 豊島修前掲論文。註(24)。(註(17) 五来重前掲書。

(46) 註(17)、同『四国遍路の寺』上・下「霊場巡礼」②・③「角川書店、一九九八年に詳しい。

(47) 後白河院が勧請した熊野権現については二社がある。一社は『百鍊抄』永暦元年(一一六〇)十月十六日条に見える「奉移熊野躰於新造社壇、今熊野是也、(中略)上皇御願也」とあり、御正体が新造に移されて、熊野新宮、新熊野の名でよばれたという。いわゆる東山に設けられた御所の法住寺殿の鎮守を指す。もう一社は禅林寺(永観堂)の鎮守社(「元亨釈書」といわれた若王子神社である。しかし後白河院が若王寺神社に参詣した様子については不詳である。註(31) 宮家準前掲書。安田元久『後白河上皇』吉川弘文館、一九八六年。

(48) 註(6) 五来重前掲書。註(11) 豊島修前掲論文。その他。

(49) 註(17)。(註(24)。

(本学教授 国史学)

(キーワード) 海洋宗教、熊野三山、修験道